

<論文>

全体主義と『アサイラム』 —E・ゴフマンを強制収容所と全体主義社会の主題に導く四つの繋がり—

薄井 明*

抄録：本論考は、アーヴィング・ゴフマンの著書『アサイラム』をそれが執筆された歴史的
文脈および彼の個人的文脈に置いて考察する試みである。これまで『アサイラム』は精神病院
のエスノグラフィ的研究と見なされることが多かったが、タイトルが表しているように、そ
れは「収容所」の比較研究と見なされるべきである。では、なぜゴフマンが収容所すなわち隔
離収容施設に関心をもつようになったのか。著者は、ゴフマンを強制収容所と全体主義社会の
主題に導いた四つの繋がりがあったと想定している。第一に、E・ゴフマンがユダヤ人移民二
世であったという事実から、第二次世界大戦終結直後に明るみに出た強制収容所・絶滅収容所
におけるユダヤ人に対するナチの残虐行為に彼が衝撃を受けたことが示唆される。第二に、シ
カゴ大学におけるブルーノ・ベッテルハイムの存在がゴフマンに強制収容所への関心を喚起し
た可能性がある。ベッテルハイムはナチ当局によって二つの強制収容所に移送され虐待を受け
た経験があるが、渡米後自らの経験に基づく論文を発表して、シカゴ大学の教授陣に加わっ
た。第三に、ゴフマンの師エヴァレット・C・ヒューズがナチ・ドイツに特別な関心を抱いて
いた。ヒューズは「全体主義的施設」の概念を考案し、論文「善良な国民と汚れ仕事」を書い
ている。第四に、ゴフマンが愛読し、しばしば引用もしているジョージ・オーウェルは
『一九八四年』で「全体主義社会」の日常生活をなまなましく描写しているが、これがゴフマ
ンに「全体主義的施設」の具体的なイメージを提供した可能性がある。

キーワード：アーヴィング・ゴフマン、『アサイラム』、全体主義的施設、全体主義社会、強制
収容所、ユダヤ人、ブルーノ・ベッテルハイム、エヴァレット・C・ヒューズ、
ジョージ・オーウェル

1. はじめに

アーヴィング・ゴフマンの著書 *Asylums* の邦訳者である石黒毅は、2015年の「第六刷へのあとがき」で次のよ
うな疑問を改めて提出している。

ゴフマンは、考究する施設の状況を表すに当って
totalitarianではなく、**total**を選ぶ理由を明らかにして
はいないが、**total**を選ぶからには二つの語の間に何ら
かの違いを考えたはずである。(中略) / 「全制的施
設の特徴について」の初稿は、一九五八年の或る精神
医学シンポジウムで発表されている。 / ハンナ・アー

レントの『全体主義の起源』の英語版はこれより早く
一九五一年に出ている。しかし博搜のゴッフマンも何
故か全くこの著作には言及してはいないのである。/
彼の沈黙は、アーレントとゴッフマンの出自、「ダヴィ
デの星」の肩布などを始め、この論文中のユダヤ人強
制収容所からの諸事例などを前にすると、何故ゴッフ
マンは、たとえば脚注にでも、全体主義に触れていな
いのか。(石黒 2015: 493) [傍点は引用者]

石黒の指摘には事実誤認がいくつか含まれているけれ
ども、「全体主義国家ナチ・ドイツにおける強制収容所・
絶滅収容所と E・ゴフマンの著書 *Asylums* との関係」と
いう論点は的確に押さえている。

事実誤認というのは、まず、E・ゴフマンが **total** を
totalitarian と同義で使用していると読める記述があるか

* 全学教育推進センター

らである。*Asylums*所収の最初の論文“On the Characteristics of Total Institutions”（以下「*Asylums*の第一論文」という）の初稿に当たる1957年⁽¹⁾の報告“Characteristics of Total Institutions”（以下「1957年報告」という）で、ゴフマンはtotalitarianの同義語totalisticを使っている。*Asylums*の第一論文の各セクションではローマ数字しか記されていないが、1957年報告には小見出しが付けられ、そこで「全体主義的な諸特徴（Totalistic Features）」という表現が用いられているのである。

Totalistic Features. A basic social arrangement in modern society is that we tend to sleep, play and work in different places, in each case with a different set of coparticipants, under a different authority, and without an overall rational plan. The central feature of total institutions can be described as a breakdown of the kinds of barriers ordinarily separating these three spheres of life. (Goffman 1958: 45)
[ボールドは引用者]

また、これに続くパラグラフにおいて、*Asylums*のテキストでは単に「これらの諸特徴 (these features)」となっている箇所が、1957年報告では「これらの全体主義的な諸特徴 (these totalistic features)」となっている。

Individually, these features are found in places other than total institutions. (Goffman 1961a: 6)

Individually, these **totalistic** features are found, of course, in places other than total institutions. (Goffman 1958: 45) [ボールドは引用者]

こうした事実を踏まえてかどうかは不明だが、ゴフマン研究で有名な Y・ヴァンカン (Yves Winkin) は、「彼 [ゴフマン—引用者] がtotal (またはtotalitaire) と呼んだ施設」(Winkin 1988: 84, 訳120頁) と述べて、英語でいえばtotalとtotalitarianをゴフマンが同義語としている、と彼は判断している。

このように見てみると、ゴフマンは、totalをtotalitarianと区別していたというよりも、むしろtotalにtotalitarianの意味を込めていたことがわかる⁽²⁾。したがって、本論考では〈total institution〉に「全体主義的施設」の訳語を充てることとする。

そして、石黒のもう一つの事実誤認は「ゴフマンは、たとえば脚注にでも、全体主義に触れていない」という指摘である。なぜ事実誤認かという点、*Asylums*所収の三番目の論文“The Underlife of a Public Institution: A Study of Ways of Making Out in a Mental Hospital”（以下

「*Asylums*の第三論文」という）の末尾でゴフマンは、「全体主義の研究者 (students of totalitarianism)」(Goffman 1961a: 320, 訳316頁) として C・ミウォシユ (Czeslaw Milosz) を挙げ、著書*The Captive Mind*⁽³⁾ (Milosz [1953] 2001) の一節を引用しているからである。しかも、ここでゴフマンが展開している議論は、彼の「社会—自己」観の核心に関わる内容である。また、ゴフマンが脚注で D・リースマン (David Riesman) の論文“Some Observations on the Limits of Totalitarian Power” (1952) に言及したり (Goffman 1961a: 197, 訳427頁)、本文で E・コゴン (Eugen Kogon) や E・A・コーエン (Elie A. Cohen) の著書などヒトラー政権下の強制収容所の記録から多数引用しているにもかかわらず、そうした事実を「全体主義に触れていない」とする石黒の解釈も奇異に感じる。

もちろん、こうした文献上のいくつかの裏付けでもって「ナチズムのドイツ (とスターリニズムのソ連) の全体主義」と「アーヴィング・ゴフマンの著書*Asylums*」との関連性が証明されるわけではない。そうではなくて、両者の関連性という問いが「解明されるべき未決の論題」として改めて設定されるということである。

以下、本論考では、主に第二次世界大戦後に明るみに出たナチによるユダヤ人の「強制収容所」「絶滅収容所」の惨状と、冷戦期にもリアリティをもっていたナチ・ドイツおよびスターリニズムのソ連という「全体主義社会」の存在がゴフマンに*Asylums*所収の諸論文を書かせるきっかけになったという仮説を証明すべく、アーヴィング・ゴフマンと彼の著書*Asylums*を時代状況および彼の生活誌的状况に置いて考察していく。その予備的作業として、次の「2」で、ゴフマンの著書*Asylums*の読解にまつわるバイアスを検討して、この著作の読み方を“初期状態”に戻す。というのも、*Asylums*は現在では「精神病院」研究の古典に位置づけられることが多いため、ゴフマンがこの問題設定に至った元々の経緯が覆い隠されている可能性があるからである。そして、本論考の本論に当たる「3」で、ゴフマンがユダヤ人移民二世であったこと、進学先のシカゴ大学に教員としてブルーノ・ベッテルハイムがいたこと、大学院での師エヴァレット・C・ヒューズがナチ・ドイツ社会に強い関心を抱いていたこと、そして、ファシズムと全体主義に抗した作家ジョージ・オーウェルの作品をゴフマンが愛読していたことの四点をめぐって、これらの繋がりがアーヴィング・ゴフマンを強制収容所と全体主義の主題に導いたと考えられる根拠を検討していく。特に G・オーウェルの影響を論じる箇所では、オーウェルの小説における「全体主義社会」の描写がゴフマン社会学の「社会—自己」観の形成に重要な影響を与えたという仮説を提出する。

2. なぜゴフマンは *Asylums* を著したのか

(1) *Asylums*は「精神病院」研究の書か

アーヴィング・ゴフマンの著書*Asylums*については、1955年から翌年にかけてワシントンDCにある精神病院セントエリザベス病院で彼が行った参与観察調査に基づいた作品であるというのが一般的な理解となっている (Smith 2006: 69)。

なるほど、ゴフマンはこの著書の「序言 (preface)」で同病院での調査の概要やその限界性、病院関係者への謝辞などを述べているし、同病院内で収集した観察データを同書の中で使っている。*Asylums*所収の四つの論文のうち第三論文の「第二部」はセントエリザベス病院のエスノグラフィーといってもよい。だが、その他の論文では彼が収集した観察データはわずかしか言及されておらず、*Asylums*で挙げられている膨大な数の参考文献と引用の全体からみると、第三論文での言及を含めたとしても、彼の観察データが占める割合はごく小さいといわざるを得ない。これらの点を踏まえると、*Asylums*の性格づけに関しては、「*Asylums*は、ワシントンDCにあるセントエリザベス病院の1950年代のエスノグラフィーとしてではなく、全体主義的施設 (total institution) の概念のエスノグラフィーとして位置づけてこそ最もよく理解できる」(Manning 2003: 170) というゴフマン研究者の指摘が正鵠を得ている。

ただ、*Asylums*がセントエリザベス病院のエスノグラフィーだといえないとしても、その「序論 (Introduction)」で「本書では、全体主義的施設一般を扱うが、特にその一例である精神病院を扱う」と述べていることから、*Asylums*は少なくとも「精神病院」研究の書ではないか、という異論が想定される。

実際、*Asylums*所収の四論文中三論文で、タイトルかサブタイトルに「精神病患者 (mental patients)」「精神病院 (mental hospital)」「精神病院収容 (mental hospitalization)」の語が入っている。また、*Asylums*でゴフマンが十回以上言及しているI・ベルクナップ (Ivan Belknap) の著書*Human Problems of a State Mental Hospital*をはじめ「精神病院」関連の論文や著書への言及が多数ある。そうしたことから、*Asylums*を「ゴフマンによる精神病院の研究」(木村 1991: 176) とする理解は、社会学では普通に受け容れられている。

しかし、それでも、*Asylums*を固有の意味での「精神病院」研究の書とする特徴づけは適切ではないと筆者は考える⁽⁴⁾。ゴフマンは同じ*Asylums*の「序言 (preface)」で、本書収録の四論文が共通して焦点を当てようとしている同一の論点が「被収容者の状況 (inmate's situation)」であるとしている。だとすれば、彼が問題にしようとして

いたのは「精神病患者」というより「精神病院という施設の被収容者」のほうである。そして、この場合、収容施設としての精神病院にみられる特徴は、精神病院にだけみられる特徴ではなく、「全体主義的施設」の一つとして精神病院にもみられる特徴だと理解すべきである。*Asylums*の第一論文に表現されているように、精神病院の調査は、理念型としての「全体主義的施設」の特徴を照らし出す一作業に位置づけられている。

本書では、〔通常の施設とは〕別のカテゴリーを構成する施設を選び出しているが、それは自然な単位を構成し理論上有益なものであると主張する。というのも、このタイプの諸施設には相当程度の共通点があるように思われるからであり、その共通点とは、こうした施設の一つについて理解したければ同類の他の諸施設を調べたほうがよいというものである。(Goffman 1961a: 3, 訳4頁⁽⁵⁾) [傍点は引用者]

(2) ゴフマンの精神病院調査の動機をめぐる言説

でも、なぜゴフマンは「精神病院」を調査したのか。*Asylums*所収の論文を執筆するに際して実際に調査したのは精神病院だけだから、依然としてこの疑問は残る。この問いに対する答えの“定番”が、E・ゴフマンが精神病患者や精神医療に特別の関心をもっていたからである、という説明である。そして、そうした関心を彼に生じさせた原因として、彼の妻アンジェリカ (Angelica Schuyler Goffman) の精神疾患の問題が挙げられてきた。すなわち、1964年4月27日に35歳で投身自殺したアンジェリカが両極性障害に苦しんできた経緯から夫アーヴィング・ゴフマンが精神医療に関心を抱き、その成果の一つが*Asylums*の公刊であった、というストーリーである。この種の説明の先駆けとなったのがY・ヴァンカンの次の記述である。

施設収容型の精神医学に対する彼 [アーヴィング引用者] の敵意は、個人的な悲劇によってさらに強くなった。彼の妻の心理状態が不安定であったのだ。心理的な麻痺状態と高揚状態が交互に現れ、それに対しては精神医学的な環境が必要であったが、アーヴィングはそうした措置を受け容れたがらなかった。*Asylums*が書かれたのは、家族が置かれたこのような文脈においてであった。(Winkin 1988: 86, 訳123頁)

このストーリーは、彼の生活誌上の事実在即しているため一定の説得力をもっていて、それゆえ“受け容れられやすい説明”となっている。しかし、妻アンジェリカの一件が私生活上いかに重大な問題だったとしても、そ

れが主たる動機でアーヴィングが*Asylums*所収の諸論文を執筆し公刊したという“解釈”は、それだけでは、もっともらしい「結びつけ」でしかない。それはちょうど、アーヴィングの姉フランセス (Frances Bay) が若い頃から本格的に演劇活動をしていたことがE・ゴフマンの「演出論的パースペクティブ (dramaturgical perspective)」の着想の基になったとか、マニトバ大学中退後にゴフマンが働いたカナダ国家映画委員会での勤務経験が著書*Frame Analysis*の遠因になった (Winkin 1988: 20) といった“受け容れやすい説明”と同種のものである。ゴフマンが精神病院に一定の関心をもっていたことは事実であるけれども⁽⁶⁾、妻の精神疾患が直接的な原因で彼が精神病院に対して強い関心を抱いたという推測には裏付けがない。したがって、この点では、「ゴフマンが精神病院に関心をもったそもそもの理由は正確にはよくわからないままである」 (Gambino 2013: 52) という研究者の判断に留まるほうが知的に誠実だと思う。ここでは、安易な「結びつけ」は禁欲して、その動機に関する説明をいったん“白紙”に戻す必要がある。

(3) タイトルが表すもの

*Asylums*を精神病院に安易に結びつけるべきではないという筆者の考えは、著書のタイトルによっても支持される。*Asylums*のサブタイトルは、単に「精神病患者の対人社会的状況に関する諸論文 (Essays on the social situation of mental patients)」ではなく、「精神病患者およびその他種々の被収容者の対人社会的状況に関する諸論文 (Essays on the social situation of mental patients and other inmates)」 [傍点・ポールドは引用者] である。このサブタイトルが表しているのは、精神病院の入院患者だけでなく、それ以外の多様な施設の被収容者を対象にしているということである。

そして、タイトルは複数形の*Asylums*であり、精神病院だけでなく「種々の収容所」を包含することを示している。さらに、「精神病院」を考察対象にしているにもかかわらず、ゴフマンがそれを*asylum* (収容所) と呼んだ意図も問題になる。そもそも*asylum*という語は、「精神病院 (a mental hospital)」の前身である「狂人収容所 (a lunatic asylum)」に使われた言葉である。後者から前者への名称変更を隔離収容施設から治療施設への転換と想定しがちであるが、「精神病院」へと名称変更したからといって「狂人収容所」の特徴がなくなったわけではない。ゴフマンが*Asylums*で何度も言及しているI・ベルクナップの著書には、そうした認識が示されている。

もちろん〔狂人収容所から精神病院への〕名称変更それ自体がポジティブな改革と考えないのは正当であ

る。そうではなく、この名称変更に意味があるとすれば、精神障害の治療法に関する態度や思考習慣に実質的な変容が生じていることを表しているかぎりにおいてである。この場合、精神病院という言葉の意義は、病院の語が精神障害の治癒可能性を含意しているという事実の中にだけである。[だが] 私たちは、こうした態度の変容とは程遠い地点にいる。(Belknap 1956: 21-22) [下線部の強調は原著者、傍点は引用者]

セントエリザベス病院をはじめ多くの「精神病院」における観察データや知見を活用しながらも、それらを「収容所 (asylum)」と呼ぶゴフマンが見据えていたのは、治療施設の面ではなく、「狂人収容所」の面すなわち隔離収容施設の面である。この点からいうと、*Asylums*に結実するゴフマンの関心事は、「精神病」それ自体ではなく、「非自発的に施設に入れられた〔精神病〕患者たちが被る自己アイデンティティの喪失」 (Shalin 2013: 11) であったいえる。すなわち、エチケット・マナーの恒常的な侵犯者としての「精神病患者」や治療施設としての「精神病院」への関心というよりも、自己アイデンティティの剥奪装置としての「収容所」 (薄井 1991: 174-177) への関心から、調査可能だったセントエリザベス病院で参与観察を行ったと考えるべきである。

3. ゴフマンを「強制収容所」と「全体主義社会」の主題へと導く四つの繋がり

書名が表すとおり、*Asylums*は「収容所」を主題とする著作である。ゴフマンが「全体主義的施設 (total institution)」の用語で括る「収容所」的施設には多様な施設が含まれるが、それらは大きく五つのグループに分けられている (Goffman 1961: 4-5, 訳4-5頁)。その五つとは、「孤児院」類、「結核療養所」類、「刑務所」類、「兵営」類、「修道院」類である。例えば、精神病院は「結核療養所」類に、強制収容所は「刑務所」類に、寄宿学校は「兵営」類に振り分けられている。

でも、なぜゴフマンは「収容所」的施設に関心を抱くようになったのか。前節で検討したように、「収容所」的施設への彼の関心が固有の意味での「精神病院」への関心から生じたのでないとするれば、それはどこから生まれたのだろうか。言い換えれば、彼の「全体主義的施設」論の原型にあったものは何かという問いである。

その答えは、ある意味で、すでに出されている。筆者は、ゴフマンが〈total institution〉のtotalにtotalitarianの意味合いを込めている、と考えている。その解釈からすれば、「全体主義的施設」を体現する施設は「全体主義国家における強制収容所」ということになる。

確かに、ゴフマンの「全体主義的施設」には「強制収

容所」が含まれ、*Asylums*の中で頻繁に言及されている。しかし、この事実だけでは、「全体主義的施設」論において「強制収容所」の問題が中心的な位置を占めていたという主張の裏付けにはならない。更なる論証が必要になる。ただ、その論証の作業を直接*Asylums*というテキストだけで行おうとしても、おそらく袋小路に入ってしまうだろう。それはちょうど、ゴフマンの著書*Stigma*が「ユダヤ人」という彼の出自と深く関わっていると予想できるのに、文献だけを資料として考察しても、解明できない事態と似ている（薄井 2019）。したがってここでもまた、迂回的なアプローチを採用したほうが突破口を開く可能性が高い。すなわち、アーヴィング・ゴフマンと彼の著書*Asylums*を時代状況および彼の生活誌的状况に置いて考察していくというアプローチである。こうしたアプローチの正当性は、例えば*Asylums*を時代状況から論評した次のような言明から引き出せるだろう。

冷戦時に全体主義の下での人間行動に関心が集まったことも関係して、強制収容所のイメージがこの作品 [*Asylums*—引用者] を特に目立つものにしていく。
(Gambino 2013: 53) [傍点は引用者]

筆者はこの指摘を、*Asylums*の読み方にバイアスを与えた歴史的な文脈を指摘したものではなく、*Asylums*の著者ゴフマンも共有していた「時代精神 (*Zeitgeist*)」を指摘したものと理解する。「東欧系ユダヤ人カナダ移民二世」アーヴィング・ゴフマンが生きた「第二次世界大戦終結直後の米国と世界」の情勢、そしてゴフマンが進学した「シカゴ大学」の状況の中に置いて*Asylums*をみていくと、ゴフマンを「強制収容所」と「全体主義社会」の主題に導いていったと考えられる四つの繋がりが明らかになる。

(1) ゴフマンがユダヤ人移民二世であったこと

第二次世界大戦期、欧州に九百万人以上いたユダヤ人の大半がナチによって強制収容所・絶滅収容所に送り込まれ、六百万人ものユダヤ人が殺戮されたとされる。そうしたユダヤ人たちの収容所での体験および「ホロコースト」⁽⁷⁾の実態を、北米の一般市民と同様に戦前期のE・ゴフマンも知らなかったと推測されるが、ドイツ降伏直後からそのおぞましい実態が明るみに出て、収容所で受けた「地獄変相」のような扱いをユダヤ人の生存者たちが語り始めたとき、「ユダヤ人」移民の子としてゴフマンも衝撃を受けたと想像される。ただ、この点に関する彼個人の反応や発言は一切伝えられていないので、ゴフマンの受け止め方については筆者の想像の域を出ない。

しかし、筆者が想像する事態と正反対に、欧州でのホ

ロコーストの実態を知った北米のユダヤ人がこの惨状に心が動かされなかったと考えるとすれば、その想定は現実離れしたものだだろう。実際のところ、絶滅収容所・強制収容所およびホロコーストの事実衝撃を受けたという米国の人文科学者・社会科学者の証言が残されている。その代表格が米国の社会心理学者S・ミルグラム (Stanley Milgram) である⁽⁸⁾。ミルグラムの名を世に知らしめた「権威への服従」実験に着手したのは、彼がホロコーストに衝撃を受けたからであり、直接的には1961年の「アイヒマン裁判」に触発されたことである。その影響について、ユダヤ人移民二世であったミルグラムは次のように述べている。同じくユダヤ人移民二世である社会批評家S・ソントグ (Susan Sontag) の言明を“入れ子”式に含む長い引用になるが、貴重な発言なのでそのまま掲載する。

実験室のパラダイムとしての服従研究の諸起源については、この章の後の箇所ですく詳しく述べてある。しかし、実験室のパラダイムは、権威に関する一般的な関心、私の世代、特に私のようなユダヤ人に第二次世界大戦中の残虐行為によって押し付けられ関心に科学的な表現を与えたにすぎない。社会批評家のスーザン・ソントグは、死の収容所の写真を最初に見たときの自分の反応を次のように描写している。

……究極の恐怖の写真目録との初めての出会いは、一種の啓示、おそらく現代の私たちに与えられる唯一の啓示、すなわちネガティブな神の顕現である。私にとってのそれは、ベルゲン・ベルゼンとダッハウ [強制収容所] の写真集であった。その写真集との出会いは全くの偶然で、1945年7月サンタモニカの書店でのことであった。写真集に写された光景は、それまで写真でも実生活でも一度も見たことのないものだった。その光景は、鋭く、深く、瞬時に私の心をえぐった。それ以来、私の人生は二分割されていると考えるのが妥当だと思えた。すなわち、(12歳だった)私とその写真集を見る前と見た後である。それらの写真が何を撮ったものか理解したのは何年か後であるが、私の人生はそれらの写真によって変わってしまった。

ホロコーストによって私自身 [ミルグラム—引用者] の魂が受けた衝撃によって私の中に服従に対する関心が沸き上がり、服従実験の具体的なイメージが形成されていったのである。」(Milgram 2010: 119-120)

[傍点は引用者]

ミルグラムとソクタグはともに1933年生まれで、ゴフマンより10歳余り若い世代だが、ゴフマンより年長の世代にも「同胞」の強制収容所体験に強く影響されたユダヤ人の社会学者がいた。例えば、ゴフマンより9歳年長のドイツ生まれのユダヤ人で、米国で活躍した社会学者L・A・コーザー（Lewis A. Coser）がそうである。コーザーは1933年パリに脱出し、1941年に渡米した後さまざまな職業に就き、一時期シカゴ大学でも教鞭を執ったことがある。彼が「貪欲な施設（Greedy Institution）」⁽⁹⁾に関する研究を行うきっかけとなったのは「強制収容所の経験や、さまざまな政治的なセクトの活動との接触から得られた問題であった」（矢澤 1996: 168）という。コーザーの著書*Greedy Institutions*（1974）は、先に発表されたゴフマンの「全体主義的施設」論を意識しているが、ゴフマンの*Asylums*（1961）に触発されてその研究を開始したのではなく、コーザーが以前から抱いていた問題意識による研究の成果だったのである。

残念ながら、この件に関する北米のユダヤ系研究者の証言や例証は多くないけれども、言語に絶するホロコーストの写真・映像や収容所でのユダヤ人の体験談が与えた衝撃は世代を超えていたと推測できる。

欧州でこれらの惨状を直に目撃したユダヤ人の人文科学者・社会学者の場合、上記の傾向は顕著に現われている。例えば、1919年ポーランドに生まれ英国で活躍した社会心理学者H・タジフェル（Henri Tajfel）に関しては、次のような解説がなされている。

その研究「最小条件集団研究—引用者」は、ポーランド生まれのユダヤ人である英国の心理学者、ヘンリー・タジフェルによって行われた。ナチズムの直接的経験が刺激となって、彼は生涯にわたって偏見、葛藤、集団間関係の問題に関心を持ち続けた。（Smith & Haslam 2012: 164, 訳205頁）[傍点は引用者]

「ナチズムの直接的経験」のないゴフマンが知的関心の面でタジフェルと同程度にその影響を受けたとはいえないかもしれないが、北米でも第二次世界大戦期に激化した「反ユダヤ主義」の影響をものに受けたと考えられるゴフマン（薄井 2018）には、ナチの狂虐の犠牲になった欧州のユダヤ人たちに「同胞」として深く同情し共感する素地はあったと考えてよいだろう。ただし、これだけでは「ゴフマンがユダヤ人強制収容所に関心を抱いていた」という仮説の裏付けにはならない。更なる補強的な論証が必要である。

（2）シカゴ大学におけるベッテルハイムの存在

ゴフマンを「ユダヤ人強制収容所」の主題へと導く人

的環境は、彼が進学したシカゴ大学に存在した。

北米において反ユダヤ主義の風潮が強かった戦前（薄井 2018: 3-6）には珍しいことだが、米国のシカゴ大学ではL・ワース（Louis Wirth）やP・ハウザー（Philip Hauser）、E・シルズ（Edward Shils）らユダヤ人の教員が教壇に立っていた。心理学者B・ベッテルハイム（Bruno Bettelheim）もその一人である。しかし、ベッテルハイムは、ユダヤ人教員の中でも異色の存在であった。というのも、ユダヤ系オーストリア人のベッテルハイムは、第二次世界大戦勃発直前の1938年から約一年間ダッハウ強制収容所とブーヘンヴァルト強制収容所に収監された体験があり、米国に移住後、それらの強制収容所における実体験と観察を基にして1943年に論文“Individual and Mass Behavior in Extreme Situations”（以下「ベッテルハイムの1943年論文」という）を発表して広く注目を集めていたからである。

第二次大戦終結前という早い時期に出されたベッテルハイムの1943年論文は、その後の「強制収容所」研究を方向づけるものになった（高橋 2000: 14）。この論文では、強制収容所生活における種々のストレスに被収容者たちがいかに適応したか、ナチの蛮行が被収容者のパーソナリティにどのような影響をもたらしたかが扱われている。ベッテルハイムによれば、強制収容所の目的は「個人としての被収容者を破壊して⁽¹⁰⁾従順なマスに変えること」「恐怖を〔収容所外の〕残りの住人にも広めること」「ゲシュタポのメンバーに〔非情教育の〕実験的な訓練場所を提供すること」である。そして、論文は「初期のショック」「収容所への移送とそこでの最初の経験」「収容所状況への適応」「収容所生活への最終的な適応」という内容で展開されている⁽¹¹⁾（Bettelheim 1943）。

ベッテルハイムは1944年シカゴ大学の心理学の助教授兼同大学附属ソニア・シャンクマン精神障害児学校の校長に就き、1947年に同大学の准教授、1952年に教授に昇任した後、1973年までシカゴ大学で教鞭を執っていた。したがって、1945年から1949年まで同大学院修士課程に在籍していたゴフマンがベッテルハイムの存在を知らなかったはずはないし、彼の1943年論文を早い時期に読んでいた可能性も高いと思われる。実際、ゴフマンは*Asylums*の脚注の二箇所ベッテルハイムの1943年論文に言及しているので（Goffman 1961a: 64; 66, 訳402頁; 403頁）、時期は特定できないが、間違いなく彼はこの論文を読んでいる。また、当時シカゴ大学でベッテルハイムが人気講師であったことから、ゴフマンがベッテルハイムの授業に出席していた可能性は低くない、と推測しているゴフマン研究者もいる（Winkin 1988: 31, 訳42頁）。同じく「ユダヤ人」であり、トロント大学時代からフロイトの精神分析に精通していたゴフマン（薄井

2017: 43-44) がベッテルハイムに関心をもっていたことは十分考えられる。ベッテルハイムの1943年論文が直接ゴフマンの「全体主義的施設」論につながったとはいえないが、欧州におけるユダヤ人の強制収容所体験という問題にゴフマンが北米の他のユダヤ系知識人よりも身近な位置で触れていたとはいえる。

加えて、シカゴ大学では数多くのユダヤ人の大学院生が同輩としてゴフマンの周囲にいたことを考えると(薄井 2019: 10)、主として大戦終結以降に明るみに出てきた欧州のユダヤ人に対するホロコーストや絶滅収容所・強制収容所の実態にゴフマンが無関心でいたということは考えられず、逆に、それらに関心を抱いていたと考えるのが妥当であろう。

(3) 師ヒューズのドイツとの繋がり

当時のシカゴ大学の人的環境がゴフマンを「ナチ・ドイツの強制収容所」の問題へと導いたと考えられる、さらに重要な人間関係が存在した。その人間関係とは、大学院における E・C・ヒューズ (Everette C. Hughes) との師弟関係である。

この師弟関係を通してゴフマンがヒューズから受けた影響として、まず、*Asylums*のキー概念である「全体主義的施設 (total institution)」を借用したことが挙げられる。「全体主義的施設」という概念の発案者は、ゴフマンではなく、ヒューズだったのである。詳しい時期は不明だが、シカゴ大学の大学院で1952年に開かれた「施設 (institutions)」に関するヒューズのセミナーにゴフマンが参加し、ヒューズ創案の「全体主義的施設」という用語をゴフマンは初めて耳にしたようである (Burns 1992: 142)。この継承関係に関して、ゴフマンは自らの著作において一切触れていない。*Asylums*では、ゴフマンと同じ意味でtotalという形容詞を使用している先行例として社会学者 A・エチオーニ (Amitai Etzioni) の1957年の論文を挙げているだけである⁽¹²⁾ (Goffman 1961: 4, 訳391頁)。「全体主義的施設」概念をめぐるヒューズとゴフマンのこうした師弟関係はそれ自体興味深い論題であるが (Becker 2003; Vienne 2010)、ここでは論じない。「全体主義的施設」概念がヒューズからゴフマンに継承されたという事実の確認にとどめておく⁽¹³⁾。

そして、さらに本論考で取り上げたいのは、そのヒューズが戦前から戦後にかけてドイツと深い繋がりをもっていたことである。ヒューズは、戦前の1930年代初頭に一回と戦後に三回ドイツを訪問し、戦後、ナチ体制下のドイツに関する論文をいくつか発表している。特に重要なのは論文 “Good People and Dirty Work” (Hughes 1962) (以下「ヒューズの1962年論文」という) で、これは1948年の訪独の際のドイツ人との会話を基にヒュー

ズが著した論文である。

この論文のタイトルで “Good People” とは「一般のドイツ国民」を指し、“Dirty Work” とは「強制収容所におけるユダヤ人に対するドイツ人の蛮行」を指す。論文の最初で、SS [ヒトラー親衛隊] による強制収容所での狂虐が次のように描写されている。

ハインリッヒ・ヒムラーの指導下、アドルフ・アイヒマンの助けを借りて、数百万もの人々が強制収容所に移送され処理された。数十万人はどうか生き延びた。心身ともに健全な状態で生還した人の数はずっと少なかった。(中略) 被収容者たちは木に登るよう命令された。SSは彼らを鞭打ち、もっと速く登るよう強いた。鞭が届かないところまで彼らが登ると、これもまた鞭打たれた他の被収容者たちが木をゆするよう命令された。犠牲者たちが木から落ちると、彼らは立ち上げられるか確かめるため蹴られた。ひどい怪我を負って立ち上げられない人は、労働に使えないとして射殺された。人の排泄物でいっぱい穴に入れられ溺れさせられた人も少なくない。(Hughes 1962: 3-4)

SSや収容所職員がなぜこのような残虐行為を行えたのかという問題はもちろんだが、それ以上に、直接は手を染めずにいた一般のドイツ国民がなぜ他のドイツ人の残虐行為を黙認できたのかということヒューズは問題にしている。すなわち、「そうした汚れ仕事 [ユダヤ人大量殺戮—引用者] が何百万人もの普通の、文明化されたドイツ人たちの間で行われ、そして、ある意味で、彼らによって行われたのはどのような事情なのだろうか」(ibid.: 4) [下線部の強調は原著者] という問いである。こうした問いを立てるヒューズの目には、ヒトラー政権下のドイツにおけるユダヤ人に対する蛮行と、戦前の米国における露骨なユダヤ人差別や戦後も続いた黒人に対するリンチとが連続的なものとして映っていた。

終戦後ヒューズは訪独して一般のドイツ人たちと会話を交わしているが、彼らは戦前のナチによるユダヤ人への極悪非道な行いに対して一定の罪悪感を抱きつつも、「知らなかった」「ナチに反対はできなかった」と自己弁護し、ユダヤ人に対する嫌悪感や差別意識をも示した。こうした現象を踏まえて、ヒューズは「社会の汚れ仕事を行う社会の除け者たちは、私たち社会の残りの人たちのために代理人として実際行動している」(ibid.: 7) との認識を示す。そして、彼は、より身近な「受刑者」と「刑務所の運営者」の関係を例に挙げ、「内集団／外集団」の対概念を援用しながら、ユダヤ人に蛮行を働いたSSや収容所職員と「一般のドイツ国民」との関係を解き明かそうと、次のように述べる。

私たちはふつうに内集団に大きな恩義を感じるが、外集団にはほとんど恩義を感じない。有罪判決を受けた犯罪者たちは外集団であり、罰を受けるべく我々の代理人の手に完全に引き渡される。これは極端な例であるが、私たちが攻撃的な感情や嫌悪感を向ける外集団は他にも存在する。我々のために彼らを処理せよと誰かに命じているわけでもないし、彼らの自由を奪ったり彼らに損害を与えるべきでないという信念をもって私たちが公言している場合であっても、である。彼らと私たちの社会的距離が大きくなればなるほど、我々のために彼らを処理せよという指令を他者の手に委ねる傾向が強くなる。(ibid.: 9)

ユダヤ人へのナチの凶行およびドイツ国民のそれに対する傍観的容認の機序を社会学的視点から解明しようとしたヒューズの1962年論文は、短い論文ではあるけれども、「ホロコースト」に関する社会学的研究の先駆けになる意欲作だったといえる。

さて、ヒューズとゴフマンの師弟関係でいうと、ヒューズが戦後初の訪独を果たした1948年時点でゴフマンはすでにヒューズのセミナーに所属していて (Winkin 1988: 35, 訳47頁)、ゴフマンが1953年に提出した博士論文ではヒューズが三人の審査委員の一人であった (Goffman 1952a)。それ以降1960年代も手紙などを通してゴフマンとヒューズの交流は続いた (Vienne 2010)。1968年に出版された師ヒューズのための記念論文集 *Institutions and the Person* にゴフマンは “The Neglected Situation” という文章を寄稿している (Becker et al. [1968] 2010: 295-299)。したがって、ゴフマンはヒューズの三回の訪独 (1948年・1953年・1958年) を知っているはずだし、ヒューズの1962年論文を読んでいたことも確実だと思う。ただ、ヒューズの1962年論文は *Social Problems* 誌の1962年夏号に発表され、*Asylums* 公刊の1961年10月の後ということから、この影響関係に疑問を呈するむきがあるかもしれない。しかし、ヒューズの1962年論文の実質部分は1948年の訪独直後にすでに完成されていて、同年カナダのマッギル大学におけるセミナーで話されていた (Hughes 2009: 87)。したがって、ゴフマンが1962年論文の原稿に当たる文章を読んでいたか、少なくともヒューズ自身または彼の周辺から話を聞いて、その内容について *Asylums* の公刊以前に知っていた可能性は十分にある。

いずれにせよ、筆者が主張したいのは、ヒューズ創案の「全体主義的施設」概念と彼の1962年論文だけの影響でゴフマンの「全体主義的施設」論が生まれたということではなく、それらに代表される、ナチのユダヤ人強制収容所とそれを許容したドイツ社会へのヒューズの関心

が師弟関係を通してゴフマンに継承されたのではないかということである。実際、「全体主義的施設」をめぐるゴフマンとヒューズとの間でやり取りがあった。その一端が1957年8月8日付のゴフマン宛てのヒューズの手紙として残されている。この手紙はゴフマンの1957年報告に対するヒューズのコメントなのだが、その中で彼は H・G・アドラー (Hans G. Adler) の *Theresienstadt* (1955) を読むようゴフマンに勧めている。この著書は、ナチがプロバガンダ施設としてチェコ北部のテレージエンシュタットにユダヤ人の高齢者と特権ユダヤ人のために建設した「パラダイス・ゲッター」(実際は絶滅収容所への通過施設)における著者アドラーの実体験を記した作品で、ヒューズはこの本の書評を1956年の *Commentary* 誌に寄稿している。

後にゴフマンは「私はヒューズに〔研究者としての〕訓練を受け、実際、『〔日常生活における〕自己呈示』はヒューズ流の構造的社会心理学に由来する」(Winkin 1988: 236, 訳146頁)と語っている。このようにヒューズからゴフマンへの強い知的影響関係が存在していたとすれば、ナチ・ドイツへの師ヒューズの関心がゴフマンにも引き継がれたことはまず間違いないだろう。先に指摘した B・ベッテルハイムの存在と併せて考えると、シカゴ大学におけるゴフマンの周辺には「ヒトラー政権下のユダヤ人強制収容所」に導く“磁力線”のようなものが存在していたことになる。

(4) オーウェルの影響

ゴフマンを「全体主義社会」の主題に導いたと考えられる、上記とは別の、そしてある意味で直接的な繋がりが存在している。それが、英国の作家 G・オーウェル (George Orwell) のエッセイ・小説の影響である。

ゴフマンが愛読した作家は何人かいるが、彼らのうちオーウェルは特に重要な位置を占めている。というのも、ゴフマンの博士論文の参考文献はほとんど全てが学術的著作だが、唯一、オーウェルのルポルタージュ小説 *Down and Out in Paris and London* (1949) ⁽¹⁴⁾ とエッセイ集 *Shooting an Elephant* (1950) の二つが末尾に記載されているからである。それだけでなく、彼は博士論文の中でこの二作品から長い引用を行い、「存在しない人－扱い」について論じている (Goffman 1953: 222-223)。

オーウェルのエッセイ・小説がゴフマン社会学に与えた影響を指摘したほぼ唯一のゴフマン研究者である A・トラヴァース (Andrew Travers) は、「存在しない人－扱い (non-person treatment)」という概念を一般化する際にゴフマンがオーウェルをいかに援用したか、次のように描写している。

後は苦もなく、ゴフマンは「存在しない人-扱い」が広く認められる現象だと想定する。それを支持する例証として、フランスの慈善病院におけるジョージ・オーウェルの体験から長い引用（42行）がなされている。存在しない人とされたオーウェルの体験の記述は背筋が寒くなるようなものであり、人間を物のように扱う人々への当惑と怒りに満ちている。オーウェルの引用によって社会的に正当化されたかのように、ゴフマンは一般化してこう述べる、「ある人物を多くの状況でそこにいない人のようにする扱いは私たちにおなじみのものである」と。（Travers 1999: 159）

ゴフマンの「存在しない人-扱い」概念がオーウェルのエッセイの影響を受けているというトラヴァースの指摘は正しい。だがその一方で、「存在しない人⁽¹⁵⁾ (non-person)」概念の系譜を論じるトラヴァースの次の言明には、看過できない事実誤認が含まれている。

ゴフマンが博士論文で引用しているオーウェル〔の思考〕と同様に大きな意味をもつオーウェルの着想があるが、ゴフマンはこれに全く言及していない。ゴフマンが一度も引用していないオーウェルの『一九八四年』（[1949] 1984）である。しかし、想像の未来世界を描いたオーウェルの *Nineteen Eighty-Four* では、「ニュースピーク」に半ば転換した英語に「非在人間 (unperson)」 ([1949] 1984: 35) という新語がある。ゴフマンの「存在しない人」とオーウェルの「非在人間」との類似性は、ゴフマンがオーウェルに全く言及していないだけに、驚くべきことである。」（Travers 1999: 169）〔傍点は引用者〕

事実誤認というのは、引用はしていないものの、ゴフマンはオーウェルの小説 *Nineteen Eighty-Four*（以下『一九八四年』という）に言及しているからである。ただし、その言及は、*Asylums*ではなく *Behavior in Public Places*の脚注に登場する⁽¹⁶⁾。

直接的または間接的な手段によって人が監視されている非対称的な場合には、自分が今観察されているのではないかと思ったら、たとえ自分を観察している特定の人物の正体がわからなくても、自分の振る舞い方を大きく修正するだろう。これは、オーウェルの小説『一九八四年』で世に知られた未来像の一つであり、そうした事態はそれぞれが孤独な人たちを社会的にコントロールしようするときに効力を発揮する暴力によって生じる可能性がある。（Goffman 1963a: 16, 訳269-270頁）〔傍点は引用者〕

このように、ゴフマンが『一九八四年』を読んでいるのは事実なのだから、先のトラヴァースの“疑問”は氷解する。この事実により、オーウェルのエッセイ “How the Poor Die” (Orwell [1950] 2009b: 277-290, 訳128-147頁) に描かれた、フランスの慈善病院での患者に対する人間扱いしない扱い方と、『一九八四年』に登場する「非在人間」(Orwell [1949] 2008: 41, 訳62頁) の語に触発されて、ゴフマンが「存在しない人」という概念を考案したか、または既存の語 non-person の彼独自の用法を考案した、という無理のないストーリーが組み立てられる⁽¹⁷⁾。

だが、オーウェルの小説『一九八四年』は、この概念の考案あるいは彼独自の用法の考案のヒント以上の影響をゴフマン社会学に及ぼした可能性がある。その可能性とは、『一九八四年』を読んだゴフマンが全体主義社会および全体主義的施設における日常生活の鮮明なイメージを作り上げ、それを基礎としてゴフマン独自の「社会-自己」観の骨格を形成していったのではないかということである。

ゴフマンは *Behavior in Public Places* の脚注という目立たない場所でオーウェルの『一九八四年』に言及しているけれども、この作品を引き合いに出して示そうとした場面設定とは「直接的または間接的な手段によって人が監視されている (a person is being spied) 非対称的な場合」(Goffman 1963a: 16, 訳269頁)〔傍点・ボールドは引用者〕である。「観る-観られる」「聴く-聴かれる」関係におけるそうした非対称的な設定⁽¹⁸⁾の究極の形として、『一九八四年』に描かれた超大国「オセアニア」の日常生活ほどインパクトがあるものも少ないだろう。その徹底した監視社会としての面を描いた『一九八四年』の一節を引いておこう。

ウィンストン〔主人公-引用者〕の背後では相変わらずテレスクリーンから声流れ、銑鉄の生産と第九次三カ年計画の早期達成についてあれこれしゃべっている。テレスクリーンは受信と発信を同時に行なう。声を殺して囁くくらいは可能だとしても、ウィンストンがそれ以上の音を立てると、どんな音でもテレスクリーンが拾ってしまう。さらに金属板の視界内に留まっている限り、音だけでなく、こちらの行動も捕捉されてしまうのだった。もちろん、いつ見られているのか、いないのかを知る術はない。どれほどの頻度で、またいかなる方式を使って、〈思考警察〉が個人の回路に接続してくるのかを考えても、所詮当て推量でしかなかった。誰もが始終監視されているということすらあり得ない話ではない。（中略）自分の立てる物音はすべて盗聴され、暗闇のなかにもいない

限り、一挙手一投足にいたるまで精査されていると想定して暮らさなければならなかった。(Orwell [1949] 2008: 4-5, 訳9-10頁) [傍点は引用者]

室内のテレスクリーンによる私生活の徹底した監視・盗聴に加えて、屋内外の盗聴マイク、知人や家族による密告にも警戒しなければならず、時間刻み・分刻みのスケジュールで同一のプログラムや行事に駆り出され、党の無謬性を信じて党への絶対的忠誠を示す人間に教育されるといった全体主義的なディストピア社会の日常生活の描写は、「全体主義社会」での実生活や「強制収容所」での実体験などをもたない読者にも強烈な印象を与える内容である。『一九八四年』に描かれたそのような対人社会的状況は、ゴフマンが *Asylums* で抽出した「全体主義的施設」の諸特徴と非常によく似ている。

全体主義的施設の中心の特徴は、通常、生活の三領域 [睡眠・遊び・仕事—引用者] を分離している障壁が取り払われている点にある。第一に、生活の全局面が同一の場所で、同一かつ単独の権威の下、遂行される。第二に、メンバーの日常活動の全局面が大勢の人と直に居合わす形で行われ、全員が同様の扱いを受け、同一の事柄を一緒に行うことが要求される。第三に、日々の活動の全局面がぎっしり詰まったスケジュールに従って行われる。(Goffman 1961a: 6, 訳6頁)

こうした環境においては、全体主義社会の成員に対して要求する「役割」以外は存在してはならず、そこから外れた“自分らしさ”というものが生存する余地はほぼ完全に奪われている。しかし同時に『一九八四年』には、命令・規則に従っている風を装い監視・盗聴をかわしながら“自分らしさ”を奪われまいとする姿が主人公ウィンストン・スミスとその恋人ジュリアを通して描かれている。例えば、ウィンストンがテレスクリーンによる監視をかいくぐって「日記」を書く行為がそれである。また、ウィンストンと密会を重ねる真理省勤務のジュリアが実行する“抵抗”も、それと同種の試みである。

党に対する組織的な反逆は失敗するに決まっているので、彼女 [ジュリア—引用者] には馬鹿げたことにしか思えないのだ。賢明なのは、規則を破りつつ、生きながらえること。(Orwell [1949] 2008: 138, 訳202頁) [傍点は引用者]

全体主義社会の徹底した監視・盗聴や全面的な管理を巧みにかわし、許可されていない手段によって禁じられ

た目的を達成することによって、かろうじて“自分らしさ”を保持しようとする主人公たちの必死の試みは、「全体主義的施設」論における「二次的適応 (secondary adjustment)」概念が指すものに酷似している。

二次的適応とは、組織の成員が公認されていない手段を用いたり、公認されていない目的を達成したり、またはその双方によって、成員のすべきこと・得べきもの、したがって成員がそういう人物であるべき像に関する組織の想定から上手く逃れる習慣的アレンジメントと定義される。(Goffman 1961a: 189, 訳201頁) [下線部の強調は原著者]

こうしたプラクティスはどの組織でも多かれ少なかれ観察できるけれども、これが最も切実さを帯び、際立ってくるのは全体主義的組織においてである。「二次的適応」概念の系譜が未解明である現状において、『一九八四年』のウィンストンとジュリアの行動がゴフマンに「二次的適応」の原イメージを提供したという想定は、納得できるストーリーの一候補にはなるだろう。

そして、『一九八四年』に描かれた全体主義社会の全面的な監視・管理・動員の力と、わずかながらもそれに抵抗を試みる二人の主人公の行動は、全体主義的施設における「二次的適応」という限定された概念を超えて、ゴフマンの「社会—自己」観の原型になった可能性がある。それに関する叙述が、*Asylums* の第三論文の末尾にある以下の箇所である。

所属するところがなければ安定した自己をもつことはできないけれども、何であれ一つの社会的単位に全面的に身を委ね傾倒してしまうと一種の自己喪失 (a kind of selflessness) に陥る。人格をもつ一人の個人であるという感覚 ([o]ur sense of being a person) は外部の社会的単位に引きずり込まれることに由来する。それに対して、個性をもつ個人という感覚 (our sense of selfhood) は引きずり込まうとする力に抗するときのちょっとした仕方によって生じる。地位 ([o]ur status) が世界の堅固な建物によって支えられている一方で、個人アイデンティティの感覚 (our sense of personal identity) はしばしばその裂け目に生息する。(Goffman 1961a: 320, 訳317頁) [傍点は引用者]

全体主義的組織という極限的な状況において最も明瞭な形で見出される「二次的適応」すなわち「施設が個人に対して自明視している役割および自己から個人が少しだけ距離をとる手法 (ways in which the individual stands apart from the role and the self that were taken for granted

for him by the institution)」(ibid.: 189, 訳201頁) [傍点・ボールドは引用者] は、「自由社会」の日常生活にもみられるプラクティスとして一般化されている (Goffman 1961a: 320, 訳317頁)。さらに、組織の要求とその要求に対して個人がわずかに距離を取るというこの構図は、ゴフマン得意の“ミニチュア化”⁽¹⁹⁾の操作を経て、対面的相互行為状況における「役割距離 (role distance)」というプラクティスとして現われる。

個人と一般にその個人のものだと見なされている役割との間に違いがあること (separateness) を他人に伝わるよう「効果的に」表出する手法のことを、私は役割距離と呼ぶことにする。(Goffman 1963b: 108, 訳115頁) [下線部の強調は原著者]

規模も程度も異なるが、自分を「地位-役割」として規定してくる社会の力に抗して“自分らしさ”を保持しようとするプラクティスである点で、*Asylums*で論じられている「二次的適応」と*Encounters*で論じられている「役割距離」は共通している。さらに、この構図はゴフマンの後期の論文“Footing” (Goffman 1981: 124-159) にも引き継がれていると考えてよいだろう。このように見てみると、ゴフマンが生涯追究したテーマとされる「相互行為秩序」論において“傍系”の著作と見なされることが多い*Asylums*は、ゴフマン社会学のもう一つの“正系”に位置づけられる可能性が出てくる。

アーヴィング・ゴフマンがジョージ・オーウェルのエッセイ・小説を愛読したことは事実であり、ゴフマン社会学へのオーウェルの一定の影響も確認できる。そうした背景をもつゴフマンが、スターリニズムの全体主義国家ソ連と「赤狩り」の風潮が支配的だった米国が鋭く対立していた1950年前後に『一九八四年』を読んで受けた衝撃は、現在の私たちが考える以上に大きかったと思われる。そして、「ユダヤ人」移民二世のゴフマンが第二次大戦後「強制収容所・絶滅収容所」におけるユダヤ人へのナチ・ドイツの蛮行とユダヤ人の大量殺戮の実態を知り、進学先のシカゴ大学でこの問題を学問的に捉えようとする教員たちの影響を受けた、という本論考の想定 of 正しさが証明されれば、ファシズムと全体主義に抗しつつ「人間らしさ (decency)」を追求した作家ジョージ・オーウェルの存在と作品がアーヴィング・ゴフマン本人およびゴフマン社会学に対してもっていた意味はさらに重みを増すことが予想される。

4. 結びに代えて

E・ゴフマンの著書*Asylums*と「ユダヤ人強制収容所・絶滅収容所」および「全体主義社会」との関連性という問題設定は、冒頭で挙げた石黒毅に限らず、ゴフマン研究者の脳裏を一度はよぎるはずだが、この問題を正面から取り上げた研究はこれまでなかった。こうした研究状況に一石を投じるべく、本論考では、主として第二次大戦後に明るみ出たナチ・ドイツの「ユダヤ人強制収容所・絶滅収容所」の実態から受けたインパクトと、当時リアリティをもって迫ってきていた「全体主義社会」のプレゼンスからゴフマンの著書*Asylums*が生まれたという仮説を立てて、彼をこの主題に導いていったと考えられる四つの繋がりについて考察した。その四つの繋がりとは、「アーヴィング・ゴフマンがユダヤ人移民二世であったこと」、「強制収容所の体験者ブルーノ・ベッテルハイムがゴフマンの進学したシカゴ大学の教員であったこと」、「シカゴ大学でのゴフマンの師エヴァレット・C・ヒューズがナチ・ドイツ社会に強い関心をもっていたこと」、「ファシズムと全体主義に抗した作家ジョージ・オーウェルのエッセイ・小説をゴフマンが愛読し種々の著作で引用・言及していること」である。これらには「推測」の域を出ないものも含まれているし、各々の繋がり単独では説得力が弱いことも否定できない。しかし、1940年代後半から1950年代の米国と世界の情勢の中に上記の繋がりを置き、それらを併せてみると、*Asylums*所収の諸論文を書こうと思い立ったアーヴィング・ゴフマンの頭の中で「ナチ・ドイツのユダヤ人強制収容所」と「ナチズムのドイツとスターリニズムのソ連の全体主義国家」がかなりの程度の存在感をもっていた可能性は高いと考えられる。

だがそうはいっても、「強制収容所」および「全体主義社会」の主題とゴフマン社会学との繋がりは、現段階ではまだ「仮説」でしかない。にもかかわらず、筆者がなぜこの問題にこだわるかという、この視点に立つことによって、*Asylums*や*Encounters*に対する読み方に新たな道が拓けるだけでなく、ゴフマン社会学の形成過程に関して従来とは異なるストーリーが生まれる可能性があるからである。しかも、そのストーリーは、より包括的で整合性のある理解につながるものである。

一例を挙げておこう。E・ゴフマンの最初の著書*The Presentation of Self in Everyday Life* (1959) と二番目の著書*Asylums* (1961) に関しては、出版年は近接しているけれども、特に視点・内容に関連性があると見なされることはなかった。しかし、これら二つの著作の間に「全体主義社会」という媒介項を置いてみると、視点上および内容上、両者には連続性が浮かび上がってくる。最初

の著書で採用された「演出論的パースペクティヴ」は「全体主義社会の日常生活場面」を原型として生まれたという仮説が立てられるのである。この仮説を支持する記述が、*Asylums*で引用されているC・ミウォシュの著書の（言及も引用もされていない）別の箇所に書かれている。

東側 [ソ連および東欧の旧社会主義諸国—引用者] の人々を支配する関係は、演技 (acting) 以外には定義しにくい。劇場の舞台の上ではなく、演技は街頭、工場、集会場、さらには住居で演じられる (perform)。演技は高度に発展した技術であり、警戒を怠らないことが望まれる。あらゆる言葉は、口に出す前に、その結果を考えなければならない。不適當なときに微笑んだり、そうしてはいけないうちにちらりと視線を向いたりすれば、危険な疑惑と非難を招くことになる。身振り、声の調子、あるいはネクタイの好みでさえも、政治的な傾向を示すと解釈される。(Milosz [1953] 2001: 54, 訳78頁) [傍点は引用者]

ゴフマンの「印象管理 (impression management)」という用語は、上記のように成員たちが監視・盗聴され、疑心を抱いて相互に密告し合っている全体主義社会の日常生活に置いたときに、真にリアリティが出てくる。「全体主義社会の日常生活場面」は、「舞台のパフォーマンス」以上に自らの服装・外見・振る舞い・仕草・表情・言動が他者に与える印象を意識的かつ持続的にコントロールしなければならない場面となっているからである。それは、行為者のちょっとした油断から「印象管理」に綻びが生じれば、その行為者は“反逆者”や“裏切り者”と見なされ、逮捕・処刑される世界である。「印象管理」という一見仰々しい用語も、恒常的に緊張を強いられた彼らの総合的な営為を思い浮かべれば、その違和感はなくなる。

これまでゴフマンの「相互行為秩序」論のテーマにおいては“中心”に位置づけられることがなかった *Asylums* という著作が、もしもゴフマン社会学の“中心”を占めるような解釈の転換が起これば、あたかも「図と地」が反転するごとく、私たちが「ゴフマン社会学」として見ていた“図柄”の中に全く予想もしなかった別の“図柄”が見えてくるかもしれない。

[注]

(1) 石黒はこの文書を「一九五八年の或る精神医学シンポジウムで発表されている」と述べているが、実際は1957年4月15日から17日にかけてワシントンDCで開催された「予防精神医学および社会精神医

学に関するシンポジウム」で報告されたものである。論文公刊は1958年だけれども、正確な発表時期を明示するために「1957年報告」とする。出典表記が (Goffman 1958) となって紛らわしくなることをお許し願いたい。

- (2) ゴフマンがアレントの *The Origins of Totalitarianism* (以下『全体主義の起源』という) を読んでいたことは確認されていないので関連性は不明であるが、『全体主義の起源』の第三部「全体主義」の第三章のタイトルは「全体的支配 (Total Domination)」(Arendt [1951] 2017: 573, 訳150頁) [傍点・ボールドは引用者] で、強制収容所の問題が詳しく論じられている。また、『小学館 ランダムハウス英和大辞典 [第2版]』にはtotalの形容詞の語義の最後に「全体主義的な (totalitarian)」と記載されている。
- (3) C・ミウォシュの著書は、ナチ・ドイツではなく、スターリニズム下の全体主義化したポーランド社会について論じている。
- (4) ゴフマンの著書 *Asylums* が「精神病院」に結びつけて読まれる傾向には歴史的な文脈も関係している。*Asylums* 出版の一年余り後の1963年2月、米国大統領 J・F・ケネディが「精神病・精神薄弱に関する大統領教書」を出した結果、米国で精神病入院患者の脱施設化 (deinstitutionalization) が進められていった。*Asylums* の内容がそうした精神医療の施策と親和的であったため“脱施設化を擁護する理論”として読まれたという歴史的事情である。
- (5) ゴフマンの著書およびヴァンカンの著書で邦訳書のあるものの訳文に関しては、該当する頁数は表記しているが、訳文をそのまま掲載していない。適宜、筆者が訳し直している。
- (6) ゴフマンの「精神病院」への関心が記述として最初に登場するのは、彼の二番目の公刊論文においてである (Goffman 1952b: 463)。この点に関しては、(薄井 2016: 10-11) を参照のこと。
- (7) 「ホロコースト」の語がヒトラー政権下で行われたユダヤ人の大量殺戮を指す用語として使われ出したのは戦後かなり後の時期であり、本論考で扱っている時代には使われていなかった。だが、現在この意味で「ホロコースト」の語が使われことが一般化しているので、この用語を使用する。
- (8) ミルグラムとゴフマンの知的関心の親和性の根拠にはならないが、ミルグラムは主著 *Obedience to Authority* の中でゴフマンの著書と論文に紙面を割いて言及している (Milgram 1974: 150; 209, 訳198-199頁; 274頁)。
- (9) (矢澤 1996) では Greedy Institution は「貪欲な制度」

- と訳されているが、「全体主義的施設 (total institution)」との訳語の整合性から「貪欲な施設」とした。
- (10) この「個人としての被収容者を破壊する (to break the prisoners as individuals)」(Bettelheim 1943: 417) という表現は、*Asylums*の第一論文でゴフマンが述べた「ある人物の自己が死滅させられる (a person's self is mortified) プロセス」(Goffman 1961a: 14, 訳16頁) を連想させるけれども、これだけでは前者の後者への影響を裏付ける証拠にはならない。
- (11) 本論考は、B・ベッテルハイムの学説または彼の1943年論文の考察を主目的にしていけないので、これ以上詳しい紹介はしない。ある程度詳しい紹介は(高橋 2000: 14-16) を参照のこと。
- (12) 「全体主義的施設」概念の直接的な出所という問題を離れてみると、エチオーニがtotalの語をゴフマンと類似した意味で組織論で用いているという事実は、1950年代年に「全体主義」の議論がある程度盛んであったことを物語っている。
- (13) さらにいえば、ヒューズの「全体主義的施設 (total institution)」概念はどのようにして導き出されたのか、という問いが立てられる。1951年に英語版が出版されたアレントの『全体主義の起源』に「全体的支配 (Total Domination)」と題された章があること、それが〈total institution〉概念をヒューズが提示した1952年のセミナーより前であることを考慮すると、ヒューズの創案にアレントの著書が影響した可能性はある。後述するように、ヒューズがヒトラー政権下のドイツに強い関心を抱いていたことからすると、ヒューズがアレントの『全体主義の起源』を読んでいたと考えたほうが自然である。
- (14) オーウェルの小説*Down and Out in Paris and London*は、ゴフマンの最初の著書*The Presentation of Self in Everyday Life*でも長い文章が引用されている (Goffman 1959: 121-122, 訳141-142頁)。*Asylums*ではエッセイ “Such, Such Were the Joys” からの比較的長い引用がある (Goffman 1961a: 26-27, 訳27-28頁)。ゴフマンはこれを*Partisan Review*誌の1952年9-10月号で読んでいて、ここからも彼がオーウェルの作品の愛読者であった様子が窺える。
- (15) 〈non-person〉を正確に訳せば「その場に存在しないと見なされる人」となるが、そうすると〈non-person treatment〉の訳が「その場に存在しないと見なされる人-扱い」と長い語になってしまうので、〈non-person〉の訳語を単に「存在しない人」とする。
- (16) ゴフマン特有の“ひねった”言及の仕方がここに現われていると筆者は考える。これはまだ「仮説」

の域を出ないが、ゴフマンの場合、影響を受けた学者や学説ほど直接の言及は避ける傾向があるように思われる。*Asylums*でもオーウェルの作品からの引用があるけれども、出典は『一九八四年』ではなくエッセイ “Such, Such Were the Joys” であり、オーウェルの「寄宿学校」体験に関するものである。

- (17) トラヴァースは、ゴフマンは引用や言及はしていないが、『一九八四年』については知っていたという仮定のうえで、これとほぼ同じストーリーを想定している。ただし、『小学館 ランダムハウス英和大辞典 [第2版]』によれば、non-personの語は1909年頃に造語されたようなので、non-person自体はゴフマンの新造語ではない可能性が高い。
- (18) 「コミュニケーションにおける非対称的な設定」というテーマは、ゴフマンの著作に頻繁に登場する (Goffman 1959: 7, 訳8頁, 他)。
- (19) ゴフマン得意の“ミニチュア化”とは、É・デュルケムが全体社会の道德状態について用いた「アノミー」概念を対面的相互行為システムが混乱に陥った状態に適用している事例 (Goffman 1959: 12, 訳14-15頁) や、デュルケムおよびラドクリフ・ブラウンがやはり全体社会のシステム状態について用いた「ユーフォリア/ディスフォリア」を対面的相互行為システムに適用している事例 (Goffman 1961b: 42, 訳34頁) などにみられる。

[文献]

- Arendt, Hannah, [1951] 2017, *The Origins of Totalitarianism*, Penguin Random House. (=2017, 大久保和郎・大島かおり 訳『全体主義の起源3 全体主義[新版]』みすず書房)
- Becker, Howard S., 2003, “The Politics of Presentation: Goffman and Total Institutions,” *Symbolic Interaction* 26, 4; 659-669.
- Becker, Howard S. et al. (eds.), [1968] 2010, *Institutions and the Person*, Aldine Transaction.
- Bettelheim, Bruno, 1943, “Individual and Mass Behavior in Extreme Situations,” *Journal of Abnormal and Social Psychology* 38: 417-452
- Burns, Tom, 1992, *Erving Goffman*, Routledge.
- Gambino, Matthew, 2013, “Erving Goffman's *Asylums* and Institutional Culture in the Mid-twentieth-century United States,” *Harvard Review of Psychiatry* 21, 1: 52-57.
- Goffman, Erving, 1952a, “Draft of Ph. D. Thesis Statement,” in Dmitri N. Shalin (ed.) *The Erving Goffman Archives*. (<http://cdclv.unlv.edu/ega/>) [2020年8月2

- 日閲覧]
- , 1952b, “On Cooling the Mark Out: Some Aspects of Adaptation to Failure,” *Psychiatry: Journal for the Study of Interpersonal Processes* 18, 3 : 451-463.
- , 1953, “Communication Conduect in an Island Community,” unpublished Ph.D. dissertation, Department of Sociology, University of Chicago. (http://cdclv.unlv.edu/ega/documents/eg_phd.pdf) [2020年8月20日閲覧].
- , 1958, “Characteristics of Total Institutions,” in *Symposium on Preventive and Social Psychiatry*, Walter Reed Army Institute of Research.
- , 1959, *The Presetation of Self in Everyday Life*, Doubleday & Company, Inc. (= 1974, 石黒毅 訳『行為と演技—日常生活における自己呈示—』誠信書房)
- , 1961a, *Asylums: Essays on the Social Situation of Mental Patients and Other Inmates*, Doubleday & Company, Inc. (= 1984, 石黒毅 訳『アサイラム—施設被収容者の日常世界—』誠信書房)
- , 1961b, *Encounters: Two Studies in the Sociology of Interaction*, The Bobbs-Merrill Company, Inc. (= 1985, 佐藤毅・折橋徹彦 訳『出会い』誠信書房)
- , 1963a, *Behavior in Public Places: Notes on the Social Organization of Gatherings*, Free Press. (= 1980, 丸木恵祐・本名信行 訳『集まりの構造—新しい日常行動論を求めて—』誠信書房)
- , 1963b, *Stigma: Notes on the Management of Spoiled Identity*, Prentice-Hall, Inc. (= 2001, 石黒毅 訳『ステイグマの社会学—烙印を押されたアイデンティティ—』せりか書房)
- , 1967, *Interaction Ritual: Essays on Face-to-Face Behavior*, Doubleday & Company, Inc. (= 2002, 浅野敏夫 訳『儀礼としての相互行為』法政大学出版局)
- , 1981, *Forms of Talk*, Basil Blackwell.
- Hughes, Everette C., 1962, “Good People and Dirty Work,” *Social Problem* 10, 1 : 3 -11.
- , 2009, *The Sociological Eye: Selected Papers*, Transaction Books.
- , 2010, “Memorandum on Total Institutions,” *Sociologica* 2.
- 石黒 毅, 2015, 「第六刷へのあとがき」, 『アサイラム：被収容者の日常世界』誠信書房に所収.
- 木村邦博, 1991, 「組織と人間：全面的収容施設における二次的適応」, 小林淳一・木村邦博編著『考える社会学』ミネルヴァ書房)
- Milgram, Stanley, 1974, *Obedience to Authority: An Experimental View*, Haper & Row, Publishers. (= 1980, 岸田秀 訳『服従の心理—アイヒマン実験』河出書房新社)
- , 2010, *The Individual in a Social World: Essays and Experiments*, Pinter & Martin.
- Milosz, Czeslaw, [1953] 2001, *The Captive Mind*, Penguin Books. (= 1996, 工藤幸雄 訳『囚われの魂』共同通信社)
- Orwell, George, [1949] 2008, *Nineteen Eighty-Four*, Penguin Books. (= 2009, 高橋和久 訳『一九八四年 [新訳版]』早川書房)
- , [1949] 2009a, *Down and Out in Paris and London*, Penguin Books. (= 1989, 小野寺健 訳『パリ・ロンドン放浪記』岩波書店)
- , [1950] 2009b, *Shooting an Elephant and Other Essays*, Penguin Books. (= 1995, 川端康雄 編訳『象を撃つ オーウェル評論集1』平凡社)
- Shalin, Dmitri N., 2013, “Interfacing Biography, Theory and History : The Case of Erving Goffman,” *Symbolic Interaction* 37, 1 : 2 -40.
- Smith, Greg, 2006, *Erving Goffman*, Routledge.
- Smith, Joanne R. & Haslam, S. Alexander (eds.), 2012, *Social Psychology : Revisiting the Classic Studies*, Sage. (= 2017, 樋口匡貴・藤島喜嗣 監訳『社会心理学再入門—ブレークスルーを生んだ12の研究—』新曜社)
- 高橋三郎, 2000, 『強制収容所における「生」』世界思想社.
- Travers, Andrew, 1999, “Non-person and Goffman: Sociology under the infulence of literature,” in Greg Smith (ed.) *Goffman and Social Organization*, Routledge.
- 薄井 明, 1991, 「〈市民的自己〉をめぐる攻防—ゴフマンの無礼・不法論の展開—」, 安川一 編『ゴフマン世界の再構成—共在の技法と秩序—』世界思想社に所収.
- , 2016, 「羽化したばかりのゴフマン社会学—第二公刊論文(1952)に関する一考察—」, 『北海道医療大学看護福祉学部紀要』第23号.
- , 2017, 「若きゴフマンの知的生活誌—高等学校時代と大学時代—」, 『北海道医療大学看護福祉学部紀要』第24号.
- , 2018, 「アーヴィング・ゴフマンはなぜ化学の勉強を続かなかったのか?—北米の反ユダヤ主義がゴフマンの人生行路と彼の社会学に与えた影響に関する一仮説—」, 『北海道医療大学看護福祉学部紀

要』第25号.

———, 2019, 「ユダヤ人移民二世アーヴィング・ゴフマンと彼の著書『ステイグマ』—二十世紀の北米ユダヤ人の社会的地位の変化がゴフマン社会学に与えた影響」, 『北海道医療大学看護福祉学部紀要』第26号.

Vienne, Philippe, 2010, “The Enigma of the Total Institut-

ion. Rethinking the Hughes-Goffman Intellectual Relationship,” *Sociologica* 2 .

Winkin, Y., 1988, *Les Moments et Leurs Hommes*, Seuil/Minuit. (= 1999, 石黒毅 訳『アーヴィング・ゴフマン』せりか書房)

矢澤 修次郎, 1996, 『アメリカ知識人の思想』東京大学出版会.

Totalitarianism and *Asylums* : On Four Paths Leading Erving Goffman to the Theme of Concentration Camp and Totalitarian Society

Akira USUI*

Abstract : This essay is an attempt to situate Erving Goffman's book *Asylums* in its historical and his personal context. The book *Asylums* has been often considered an ethnographical study of a mental hospital, but it should be considered a comparative study of “asylums” as the title of the book represents. Then, what created Goffman's interest in asylums, or isolation and detention facilities? The writer assume that there were four paths leading Goffman to the theme of concentration camp and totalitarian society. First, the fact that E. Goffman was a son of Jewish immigrants suggests that he was greatly shocked by the Nazi's atrocities against Jewish people in concentration camps and extermination camps which had been uncovered just after the end of World War II. Second, the presence of Bruno Bettelheim at the University of Chicago might have aroused Goffman's interest in concentration camps. Bettelheim who had been sent to two concentration camps and brutally treated by the Nazi authorities emigrated to the US, gave a paper on his experience, and joined the faculty of the University of Chicago. Third, Everette C. Hughes who was E. Goffman's mentor had cherished a special interest in the Nazi Germany. Hughes invented the concept “total institution” and wrote the essay, “Good People and Dirty Work.” And fourth, George Orwell whom Goffman liked reading and often quoted drew a vivid image of everyday life in a “totalitarian society” in his *Nineteen Eighty-Four*, which might have provided Goffman with a concrete image of everyday life in “total institutions”.

Key Words : Erving Goffman, *Asylums*, total institution, totalitarian society, concentration camp, Jewish people, Bruno Bettelheim, Everette C. Hughes, George Orwell

* Center for Education in Liberal Arts and Sciences